シネマ女性学

美しい言葉を探して

松本 侑壬子・ジャーナリスト

韓国のどこか地方都市。川が流れている。川下に据えたカメラに挑むように水が流れ、やがて、制服の少女の遺体を運んでくる。川岸で遊んでいた少年らがそれをじっと見ている―。

この町に住む66歳のミジャ（ユン・ジョンヒ）は、中学３年生の孫息子ジョンウクと二人暮らし。遠い釜山で働く娘に代わって引き取ったものの、中学生男子とは会話もろくになく、何を考えているのかさっぱりわからない。自分自身は、最近物忘れが激しくなり、医者からアルツハイマーの検査を受けるように言われている。不安だけれど、気が進まない―と、どこにでもいそうな平凡な初老の女性の話である。

ある日、ミジャは通りがかりに見た「あなたも詩人になれます」という広告に惹かれて、「詩の講座」の受講を申し込む。少女時代に、詩人になれるよ、と教師に言われたことを思い出したのだ。講師の「詩を書くにはよく見ること。人生で一番大切なのは見ること」という言葉に従って、ミジャは身の回りのものに目を凝らす。林檎、木の梢、空…とつくづくと眺めては、美しい言葉を探し、手帳に書きつける。でも、それを詩にするには、どうすればいいのか…。

そんなミジャにとんでもない出来事が知らされる。ジョンウクと仲間の６人組が自殺した女子生徒に数ヵ月もの間、秘かに性的暴行を繰り返していたというのだ。ショックで呆然自失のミジャだったが、少年たちの父親や学校、警察も、事件が外へ漏れないように穏便にことを済ませようと善後策にやっきになっている。果ては、唯一の女の保護者であるミジャは被害者の母親を説得する役を頼まれてしまう。

介護ヘルパーとして働くミジャは、もう１つ頭の痛いことがあった。仕事先の「会長」と呼ばれる半身不随の老人がバイアグラを飲み、「死ぬ前に男にしてくれ」と風呂場で求めてきたのだ。一旦は衣服を投げつけて立ち去るミジャ。

世界をよく見ることという講師の言葉は、思いがけない形でミジャの視界を広げていく。いつしかミジャの思いは、アグネスという洗礼名を持つ少女に寄り添い、暴行が行われた教室や慰霊ミサを訪れ、少女が飛び込んだ橋の上にも行って見ずにはいられない。川べりの石に腰かけ、開いた手帳を涙のような雨粒が濡らす。ミジャは立ち上がると老人の家に行き、願いをかなえてあげる。少女への賠償金のために。

口数の少ないミジャは、どこか漂うような浮世離れした感じの女性だ。何を考えての行動なのか、カメラはただミジャを追い、説明はない。決して豊かではない生活だが、いつもおしゃれだ。高価なものでないが、レースのマフラーや帽子、花柄のブラウスやスカート、柔らかい素材の少女っぽい出で立ちで、それが個性になっている。詩の朗読会で猥談をする男がいて、珍しくミジャは苦情を言う。美しいものを求め、美しい言葉を詩に編もうと願うが、現実はあまりにも厳しい。しゃがみこんで思わず流す涙を、思いがけない人が受け止めてくれた。

詩作教室最後の日。発表されたミジャの詩「アグネスの詩」は、ミジャの心が少女に重なった見事な魂の叫びだった―。ミジャは詩人になった！

『ポエトリー アグネスの詩（うた）』

韓国映画（139分）／イ・チャンドン監督

２月　銀座テアトルシネマにて公開

©2010 UniKorea Culture & Art Investment Co. Ltd. and PINEHOUSE FILM.